【海外最新事情】

イギリス

（1）最新式速度探知撮影機

英国ではここ何年かの間に、自動車の速度違反を取り締まるための速度探知撮影機の数が急激に増えている。昨年夏に購入した英国全土の道路地図には、速度探知機が設置されている場所が記号で示されていたが、実際に走行していると地図に表示されている箇所より遙かに多くの場所でこの機械を見かけた。地図が編集された後でまた増えたということなのであろう。

現在あるこのような装置は、日本にあるそれと同様、固定された箇所から通過する車の速度を探知して、制限速度を一定以上超過して走行している車を自動で撮影するものである。この装置を‘Gatso’と呼ぶらしい。日常会話ではもちろん‘speed camera’と言っているが。また、二カ所に固定されたカメラの間を走行した車の平均速度を瞬時に計算し、一定以上超過している場合に自動撮影する‘Specs’というタイプのものもあるが、これは非常に高価であり（一組数十万ポンド）、実用性に乏しいという。

そこで今回、二台のうちの片方を可動式にした、比較的安価な（一組２万ポンド）最新式スピードカメラ‘Spike’が開発された。2006年10月10日付けの『テレグラフ』によると、二台のカメラの間隔はどんな距離でもいいのだそうだ。この記事には、スピードカメラ反対運動家（というのがいるらしい）のコメントが掲載されている。この人はポール・スミスという名前なのだが、「こんなものがそこら中に設置された日には、ほとんど数秒ごとに速度計を見ながら運転しなければならなくなる」と述べている。

だが英国は偉大なる経験主義の国であるゆえか、制限速度の設定も実態に即している。高速道路で時速70マイル（112キロ）、一般道路で60マイル（96キロ）、市街地では30マイル（48キロ）である。この程度の制限速度なら文字通り遵守することが出来よう。日本でも最近、警視庁が制限速度を見直すことを検討し始めたようだが、是非とも英国的経験主義を見習って実態に即した速度設定にしてもらいたいものである。

（2）伝統的ファースト・フードの行く末

昨年の『語研ニュース』第13号で地球温暖化と北海の魚類の分布（特にフィッシュ・アンド・チップスの主要メニューとなる鱈の一種コッドの生息域の北上）についてお話ししたが、問題はそればかりではなく、実は北海ではコッドの絶対数が急激に減少し、このままでは絶滅さえ危惧されるという。2006年10月18日の『タイムズ』によれば、国際海洋開発会議（the International Council for the Exploration of the Sea: 略称ICES）が警告を発し、北海のコッドを絶滅から救うには禁漁以外に方法がないと言っているのだそうだ。このICESがコッドの禁漁を提言するのは今回が初めてではなく、すでにスコットランドでは今年になってからコッドの捕獲量を15パーセント削減したという。大手スーパー＜アズダ＞では夏の間北海産のコッドの販売を中止していた。

ICESはまた、コッドを保護するためにはハドック（同じく鱈の一種）やプレイス（鰈の一種）の捕獲をも全面禁止する必要があるとも言っている。何故ならハドックやプレイスを獲っているときにコッドも一緒に獲れてしまい、しかもそれはコッドの捕獲制限を越えた分なので、仕方なくコッド

の死骸を海に捨てているのだそうだ。しかもこうして捨てられるコッドの量は年間捕獲量の二倍に相当するという。コッドはハドックやプレイスよりも大きいため、コッドだけが網に掛からないようにする方法はないらしい。

コッドばかりでなくハドックやプレイスもまた、フィッシュ・アンド・チップスの定番メニューである。北海でのこれらの魚の捕獲が禁止されれば、これらのメニューの価格が暴騰することは明らかである。ただでさえ、米国伝来の各種ファーストフードに押されて、伝統的なフィッシュ・アンド・チップスの店はここ十数年で急速に減少している。しかもこのところ、英国では肥満が国民的問題になっていて、フィッシュ・アンド・チップスもその元凶のひとつとされている。何しろ英国は、首相自らが国民に向かって「野菜や果物をもっと食べよう」などと言っているような国なのである。だがしかし、健康によくないにもかかわらず、あるいはよくないがゆえに余計に、美味に感じられる食品というのも確かに存在するのだ。この英国の伝統的ファーストフードもまたそのひとつに違いない。 (安藤　聡)

フランス

看護学生たちのデモ

フランスでは、街頭デモやストが頻繁に行われ、政治を動かすこともしばしばある。これまでも、本誌あるいはこのコーナーでしばしば紹介してきた。デモは、フランスの伝統といっても過言ではない。

ごく最近では、「全国看護学生連盟」(FNESI)の呼びかけで2006年11月２日に看護学生らによるデモがあった。パリでは、フランス全国から、警察発表で3000人、主催者発表で6000人が参加したほか、マルセイユでは1500人（主催者発表)、ボルドーとモンペリエでそれぞれ600人ずつ、トゥルーズでは500人がデモを行った。

彼らの要求は、他の学生との不平等解消にある。他の学生の身分や学位認定が教育省の所轄下にあるのに対し、看護士を目指す彼らの場合には厚生省の所轄下にあるという制度上の違いから、他の学生が受けることのできるサービスや扶助を受けることができないなどの不平等があるためである。具体的には次の要求を掲げている。

- LMD（注）への移行の枠内での大学化により、正当で現実にあった教育の認知を行うこと。教育期間が３年であるにもかかわらず、２年終了と同等の扱いになっている。
- 教育機関のあり方を改革し、学生の身分の正当な価値を認め、時代遅れの実践と規則を廃すること。
- 看護学生に対する扶助制度を改革し、すべての学生間での真の平等を実現すること。

ところで、本年４月に、ストとデモによって新雇用法が撤回に追い込まれたことは、記憶に新しい。この出来事はわが国でも大きく報道されたが、振り返っておけば、１月に導入された新雇用法、すなわち、26歳以下の若者について、初回採用２年間の試用期間中は、なんの理由説明もなく企業が解雇できるという法律に対する抵抗運動であった。３月７日には全国各地で100万人の労働者や学生、年金生活者らによるデモが行われ、４月４日には300万人が抗議行動に参加したとされる。

今回の看護学生たちの抗議運動は、それに比べればはるかに規模が小さく（フランスでの一般的なデモと比べても規模は小さいほうである)、また要求内容もささやかであるとは言えるが、フランス全国で８万人いるとされる看護学生たち自身にとっては切実な要求運動である。FNESI の呼びかけによる同趣旨のデモは2003年11月にも6000人以上を動員して行われたが、今度こそ彼らの要求は聞き入れられるであろうか。

（注）フランスでは、2003－2004年度からEU諸国共通の学位制度への移行がはじまった。３年間の Licence 課程（DEUG・２年＋Licence・１年)、

２年間の Master 課程（Maitrise・１年＋DEA・１年または DESS・１年)、Doctorat 課程（３年～）を合わせて、LMD と呼ばれる。

2006年11月３日・記（田川光照）

スロベニア

スロベニアには“愛”がある

2006年８月、学会発表のため、筆者はスロベニア共和国を訪れた。

みなさんは、スロベニアについてどの程度ご存知だろうか。聞いたことはあるけれど、どこにあるかはわからない、という人も多いのではないだろうか。事実、スロベニアから帰ってくると、友人知人から「スロバキアはどうだった？」と聞かれることが多かった。そこで、まだ日本にとって馴染みの薄い「スロベニア共和国」を紹介しようと思う。

スロベニアは、約２万km²という四国とほぼ同じ面積に日本の人口のほぼ60分の１にあたる約200万人が住む、中欧の小さな国家だ。北はオーストリア、東はハンガリー、南はクロアチア、西はイタリアと接していて、それぞれの文化の影響を受けている。例えばスロベニア料理である。オーストリア風のケーキ、ハンガリー風の煮込み料理が有名だ。ピザやパスタも本場イタリアよりずっと安くてしかも大変おいしい。

日本からの直行便は無く、近隣国から入ることになる。筆者の場合、UAE のドバイを経由してオーストリアのウィーンに飛び、そこから国際鉄道でスロベニアへ入った。国境ではパスポートの検問がまったく無く、トンネルを抜け、気がつくとそこはスロベニアであった（帰りはヒースロー空港でのテロ未遂の影響か、パスポートチェックがあった)。

スロベニアの第一印象は、独立して間もない国らしい若々しさだった。スロベニアは、もともと旧ユーゴスラビアを構成する６共和国の一つであったが、ソ連の崩壊、東欧革命の影響を受け1991年に独立を宣言したのである。その際、旧ユーゴ連邦軍と10日間の武力衝突が発生したが、ECの調停により停戦が成立、92年にはEU各国等から国家として承認されている（日本もこの年承認)。15年経った今、民主化も経済改革も順調に進み、物質的な豊かさは先進国並みとは言えないが、人々はゆったりと生活を楽しんでいるようにみえる。学会が行われた首都リュブリャナは、これからまだまだ成長していく若者のように、明日が今日より輝いていると信じていられる街である。古い街並みに若々しさを宿した不思議な魅力を感じた。

スロベニアの公用語は、スラヴ語派南スラヴ語群に属するスロベニア語である。ホテルから会場のリュブリャナ大学までバスで15分ほどだったが、英語がほとんど通じない状況でスロベニア語のわからない筆者は「降りるべきバス停に着いたら教えてくれ」と身振り手振りで頑張り、何とか学会会場に着くことができた。会場のリュブリャナ大学には1995年に日本研究講座が開設され、約200人の学生が日本語や日本文学、翻訳技術、東アジア史などを学んでいる。おかげで会場に入れば、ありがたいことにすべて日本語でOKだ。

また、スロベニアは、現在観光産業に力を入れている。アルプス山脈の南端には、世界中から観光客が登山やスキーにやってくる。また、アドリア海沿いの短い海岸線ではプチセレブなリゾートが楽しめる。内陸部は鍾乳洞の宝庫で、巨大なポ

ストイナ鍾乳洞が世界遺産に登録されている。日本人観光客も2005年には年間１万2152人がスロベニアを訪れている。

それに比べて在留日本人は非常に少なく59人(2006年)、在日スロベニア人はもっと少ない29人(2005年）となっている。これではせっかく日本研究講座を卒業してもなかなか仕事が見つけられない。日本企業が進出し、留学交流などが盛んになることが期待される。

観光以外に、スロベニアが力を入れているのはワインの輸出である。朝日新聞にも紹介されているが、スロベニアは2000年を超えるワイン造りの歴史を持つといわれる。筆者はリュブリャナ大学日本研究のアンドレイ・ベケシュ教授のご案内にて醸造会社直営のワインバーを訪れ、「名古屋話」に花を咲かせながら赤、白、ロゼとご相伴した(教授は名古屋に半年ほど滞在し戻ったばかりで、地下鉄東山線の多言語アナウンスにいたく感激したご様子)。ワインはまったくどれも個性的ですばらしい味だったが、欧州市場はだぶついたワインに悩む激戦区であり、知名度の低いスロベニアワインには厳しい戦いになりそうだ。現在、醸造家たちは輸出用高級ワインの生産に力を入れているそうで、日本でもおいしいスロベニアワインが飲める日もそう遠くは無いかもしれない。

さて、ここまで読み進めた読者はすでにスロベニアに詳しくなっているはずだが、それでもまだスロバキアと間違えそうなら、「スロベニアには“愛”がある」と覚えてほしい。スロベニアの綴りは“Slovenia”、つまりloveがあるのだ。愛を探している人、スロベニアを訪れてみてはいかが？

参考文献：
重盛千香子「リュブリャーナ大学文学部アジア・アフリカ研究学科日本研究講座2004/2005年度機関報告」『日本語教育連絡会議論文集』VOL. 18，2006
朝日新聞「スロベニア産ワインいかが　ユーロ導入、輸出に活路」2006年７月13日朝刊
地図・統計資料の出典は外務省ホームページ
http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/slovenia/ （2006年11月６日閲覧）

（梅田康子）

中　国

北京大学副教授の悲劇

中国語でブログのことを「博客（bókè)」と言う。これはブログという外来語に、「博（bó)」という漢字の音と「客（kè)」という漢字の音をあてた、いわゆる音訳である。ただブログは、幅ひろい訪問者（客人）に読まれることを想定したWeb上の日記であることから、おそらく「博い客」という意味も、そこには含まれているのであろう。

ところで、新華社の伝えるところによれば、北京大学のある副教授のブログに書き記された日記の内容が大きな反響を引き起こしたとのことである。その副教授は、自らのブログの中で、勤務先の北京大学から得ている月給の合計金額と毎月の支出の詳細とを、あたかも家計簿を記すかのように公表し、支出が収入を超えていること、「収入を増やす手だてを考えず、このままただ大学からもらう給料だけに頼っていたのであれば、とても生きていけない」と自らの窮状を訴えたのである。ちなみに、この副教授が北京大学から支給されている月給の合計金額は、4786元（１元＝約13円）とのことである。

この副教授の自らの窮状に対する訴えに、世間はいかなる反応を示したか、といえば、彼に同情を示す意見はほとんどなく、逆に彼に対して手厳しい意見ばかりであったそうだ。世間一般の目には、5000元に近い月給というのは、普通の人の月給の数倍に当たり、それだけで十分に恵まれている、と映るのだ。5000元にものぼる月給をもらっていながら、「どうやって生きていけばいいのか」などと訴えてみても、世間にはとうてい納得されるわけはなく、それこそ一般の人々は「どうやって生きていけばいいのか」と、かえって反発を招く結果となってしまったようである。

また、世間は大学教授という存在を、エリート中のエリートであるがゆえに、一般の人々の期待を一身に背負い、社会的責任を果たすべき存在、と見ているのである。それゆえ、自らの収入と支出とを公表し、憚ることなく自らの金銭問題を話題にする副教授の行為が、彼らの目には、社会的な責任よりも個人的な利害を優先する行為と映ったのであろう。この点も、副教授に手厳しい意見が殺到した大きな原因であろう、と記者は分析する。

さらに、記事によれば、副教授の家計における支出の半分近くが子供の教育費であるという。この点などは同情の余地がありそうにも思えるが、副教授に対する批判は、なおもやまない。大学の教員は、学生が納める高額な学費の受益者なのであり、その点を棚上げにして、自分の子供が通う中学や高校の学費や雑費が高いなどと不満を漏らしたところで、それは一面的な見方にすぎず、全く同情に値しない、というのである。

ブログ上で自らの窮状を訴えた副教授。ここまで波紋が広がるとは思ってもいなかったであろう。それにしても、大学教員に対する世間の目は、かくも厳しいものなのか。私自身、自らの給与明細を見ると、ついついこの副教授に同情したくもなるのであるが、これ以上言うと、同じように袋叩きにされそうなので、もう何も言うまい。粛々と研究と教学に励み、自らの社会的責任を果たすこととしよう。 (矢田博士)

韓　国

韓国の若者たちが用いる縮約語

アルクから出版されている『韓国語ジャーナル』18号（2006年10月９日発行）の News & Topics で、10代の若者が使っている縮約語として「486」というのが紹介されている。これは「사랑해（愛してる)」を意味するのだそうだ。どうして「486」が「愛してる」なのかといえば、「사랑해」の「사」が４画、「랑」が８画（実際には６画であるがㄹの線をすべて１画として数えている)、「해」が６画、これら画数を合わせると「486」になるからである。

このような数字による表現でまっさきに思い浮かぶのは、ノ・ムヒョン政権の支持基盤となっている「386世代」である。これは、若者の表現ということではなく一般に広く用いられている。この「386世代」は1990年代に30歳代で、80年代に学生生活を送って民主化運動を経験した60年代生まれの世代を意味する。30歳の「3」、80年の「8」、60年の「6」を組み合わせたものである。「386世代」の「386」は、実際の数字を略したもので意味との連関が強いのに対して、「486」の場合、たんに文字の画数を示したにすぎず、意味との連関はきわめて希薄で、縮約語というよりも若者の符牒、あるいは暗号とも言いうるものである。

インターネットで調べれば、このような暗号に近い若者言葉はまだまだあり、たとえば、「124 1365 486 486」というのがある。この中の「486 486」は上記の「486」を繰り返したもので、「愛してる、愛してる」の意味である。その前の「124 1365」は韓国語と直接的な関係がなく、また「386世代」の「386」に類した発想からきているので、謎々を解く要領でその意味を考えてみていただきたい。解答はこの文章の末尾で。

上の数字はまだ解読可能かもしれないが、「1365527124012486」となるとお手上げである。最後の「486」はもちろん上記の「486」である。しかし、その前の数字の羅列は謎々を解く要領ではとうてい解読できない。この「1365527124012486」全体の意味は、なんと「1年365日、52週、1週間、毎日24時間永遠に愛してる」となるのだそうである。最初の「136552」が「1年365日、52週」であり、次の「7」が1週間（＝7日)、それに続く「124」が「毎日（1日）24時間」の意味で、その後の「012」が「永遠に」を意味している。「012」がなぜ「永遠に」であるかといえば、「永遠に」を意味する韓国語「영원히」の「영」が「零」の韓国語読みと同じであることから「0」で、「원」が「元」や「源」の韓国語読みと同じであることか

ら、それら漢字語の意味を汲んで「1」で表したのであろう。さらに「2」は「영원히」の発音が「ヨンウォニ」となるので、「ニ」に含まれる「イ」が数字の「2（이)」の発音と同じであることからきていると思われる。

もうひとつ、数字と記号、アルファベットを組み合わせたとてつもない例をあげておこう。それは、「!25=i=U」というものである。パスワードとして使えそうな文字列であるが、これは、「느낌이 오는 아이는 너뿐이다（感じがする（ピンとくる）子は君だけだ)」と読むのだという。感嘆符号「!」は韓国語で「느낌표」というので、「!」で「느낌（感じ)」を表し、「2」は日本語の「が」に当たる助詞「이」が数字「2」の綴り・発音と同じであることから、「!2」で「느낌이（感じが)」を意味させている。「5」は「오는」(動詞오다の現在連体形。なお오다の本来の意味は「来る」)の語幹「오」が数字「5」の綴り・発音と同じであることから、これを「5」で表し、現在連体形語尾「는」は、体言につく日本語の「は」にあたる助詞「는」と同じであることから、これを等号「=」で示して、「5=」で「오는（来る、ここでは「する」)」を意味させている。「i=」の「i」はこのアルファベットの名称「アイ」が「아이（子)」の発音と同じであることからきており、「=」は体言につく助詞「는（は)」を表し、結局「i=」で「아이는（子は)」を意味させている。さらに、「U」は言うまでもなく英語の “you” で、「너（君)」を意味しているのである。かくして、「!25=i=U」で「느낌이 오는 아이는 너뿐이다（感じがする子は君だけだ)」となる。

さて、上で問題にしておいた「124 1365」の意味は解読されたであろうか。後続の文を読んでもらえば解けたのではないかと思うが、「１日24時間、１年365日」である。したがって、「124 1365 486 486」全体で「１日24時間、１年365日、愛してる、愛してる」となる。 (田川光照)

〈編集後記〉

初めて編集の仕事を経験しました。委員になった頃は、まだ秋らしさなど感じられない季節でしたが、原稿の締め切り日間近になると、原稿依頼、入稿確認、校正、紙面編集など作業が続き、あっという間に秋が深まっていきました。慣れない作業で、多々不手際もありましたが、皆様の温かいご支援で何とか無事発行にこぎつけました。みるみるうちに原稿が集まったときには、大感激でした。この場を借りて御礼申し上げます。

今号は、ロマンティックな古典の話から今時の元気なお爺さんまで、身近な辞書の使い方から遠い惑星の名の由来まで、大変バラエティに富んだ内容になっていますので、読者の皆様には楽しんでいただけると思います。気に入ったらお友だちにも薦めてください。私もクリスマスにはできたての語研ニュースを配り歩きたいと思います。

これからも語研ニュースの発展にご協力ください。次回はもっと段取りよく作業にかかりますので、A先生、よろしくお願いいたします。 (U)